

# 米とイスラエルはシリアを破壊し、それを平和とよぶ

ジェフリー・サックス

コモン・ドリームス 2024年12月12日

<https://www.commondreams.org/opinion/us-israel-syria>

イスラエルのネタニヤフ極右政権と、これを支持するアメリカの干渉によって、中東は廃墟と化した。リビア、スーダン、ソマリア、レバノン、シリア、パレスチナで戦争が公然化し、激化した。イランは核保有の危機に進みつつある。ここまでの戦闘で100万人以上の死者が出た。

ローマの歴史家タキトゥスの有名な台詞がある。「攻撃し、虐殺し、偽りの名目で篡奪することを彼らは帝国と呼び、砂漠を作ることを彼らは平和と呼ぶ」というものである。

現代において、荒廃した砂漠を作って、これを平和と呼んでいるのはイスラエルとアメリカだけである。

話は単純だ。ネタニヤフ首相らは、国際法に真っ向から逆らって、700万人のパレスチナ・アラブ人を支配する権利を主張している。イスラエルによるパレスチナの土地の占領が現地民の抵抗につながると、その抵抗に「テロリズム」のレッテルを貼る。そして「テロリスト」を支持する中東の政府を転覆させるよう米国に要求する。イスラエル・ロビーの影響下にあるアメリカは、イスラエルのために中東諸国に戦争を仕掛ける。

**シリア陥落のシナリオはいつ書かれたのか？**

今週のシリア陥落は 1996 年まで遡る。ネタニヤフ首相が就任したとき以来の、イスラエルとアメリカによる対シリアキャンペーンの集大成である。イスラエルとアメリカの対シリア戦争がエスカレートしたのは、2011 年と 2012 年。このときバラク・オバマは、「ティンバー・シカモア作戦\*」で CIA にシリア政府の転覆を密かに命じた。その努力は今週ついに「結実」したが、2011 年以來の戦争で 30 万人以上が死亡した。

\*編注： CIA が主導するシリア反政府各派への秘密援助作戦。そのすべてが軍事組織なので、援助の内容も軍事援助が大半を占める。

シリアの崩壊が急速に進んだのは、10 年以上にわたる経済制裁、戦争による重荷、米国によるシリア産石油の接収などに起因している。加えて近年では、ロシアがウクライナ紛争に集中するために優先順位の明らかな低下があった。そして何よりも、シリア政府の重要な軍事的後ろ盾であったヒズボラに、イスラエルの攻撃が集中した。これらの原因が重なった。

アサドがしばしば統治を誤り、深刻な内部不満に直面していたのは間違いないが、政権は何十年もの間、アメリカとイスラエルによって打倒目標にされていた。

2011 年に打倒キャンペーンが本格化する前、シリアは中所得国として機能し、成長していた。2009 年 1 月、IMF 理事会は次のように述べている。

近年のシリアには力強いマクロ経済パフォーマンスが見られる。それは石油以外の GDP の急速な伸び、余裕のある外貨準備高、政府債務の低水準と減少に現れている。この実績は、地域需要が堅調に推移していること、重点をより市場経済にシフトする当局の改革努力を反映している。理事会はこれを歓迎する。

2011 年以來、繰り返される空爆、各地で活発化する原理主義勢力、米国による経済制裁と油田の接収など、イスラエルと米国がシリアに仕掛けた「永久戦争」は、シリア国民を不幸のどん底に沈めた。

## 「平和のための土地」と「平和のための平和」

戦争によってこの地域の地図を塗り変えようとするネタニヤフの野望は、ほぼ30年前に始まったのだが、それが私たちの目の前で仕上げられようとしている。

政府崩壊直後の2日間で、イスラエルはシリア全土で約480回の空爆を行い、ラタキア停泊中のシリア艦隊を完全に破壊した。拡張主義を追求するネタニヤフ首相は、ゴラン高原の非武装緩衝地帯の支配権を不法に主張し、ゴラン高原は「永遠に」イスラエルの一部になると宣言した。

12月9日の記者会見で、イスラエル首相は「絶対的勝利」を自慢し、次のようにのべて、ガザで続く大量虐殺と地域全体に拡大する暴力を正当化した。

考えてみてほしい。もしわれわれが、「戦争は止めなければならない」と言ってきた人たちの言うとおりにしていたら、ラファに入ること、フィラデルフィア回廊を占領することも、シンワルを排除することも、大胆な作戦態勢でレバノンと全世界の敵を驚かせることも、ナスララを排除することも、ヒズボラの地下ネットワークを破壊することも、イランの弱点を露呈することもなかっただろう。戦争が始まって以来、われわれが行ってきた作戦は、枢軸勢力の拠点を一つずつ解体している。

あまり理解されていないが、イスラエルによるシリア政府転覆作戦は長い歴史を持っている。それは記録文書によれば明らかである。

イスラエルの対シリア戦争は、米国とイスラエルの「新保守主義」（ネオコン）によって始まった。それは1996年のことであった。彼らは、ネタニヤフ首相が就任する際に、中東のための「クリーンブレイク」戦略を策定した。この作戦の核心は、イスラエル（とアメリカ）が連合し、共同歩調をとることになった。

作戦のゴールは、クリントン政権が提唱し支持してきたオスロ合意、すなわち「平和のための土地」という考え方を拒否することにあった。「平和のための土地」という考え方は、イスラエルが和平と引き換えにパレスチナの占領地から撤退するという考えだ。つまり平和と土地の交換という取引であった。

その代わりに、ネオコンが持ち出した考えが「平和のための平和」である。この構想によれば、イスラエルは占領したパレスチナの土地をそのまま保持し、「平和のための」交換条件として提出するようなことはしない。

アパルトヘイト国家としてパレスチナの人々を隷属させ、段階的に民族浄化を進める。同時に、イスラエルの領土権の主張に抵抗する近隣諸国に対しては政府を転覆することで、いわゆる「平和のための平和」を強制する。

## **テロリストと戦うのではなく、テロリスト支援国家と戦う**

クリーンブレイク戦略は、「われわれは2000年もの間、希望を抱いて健闘してきた、この土地に対するわれわれの主張は正当であり、崇高なものである」と主張している。

そのうえで、「シリアはレバノンでイスラエルに挑戦している。効果的なアプローチは、侵略の主体であるヒズボラ、シリア、イランをレバノンで闘争に巻き込み、北方国境沿いの戦略的イニシアチブを握ることだろう...それならアメリカ人も共感できる」と述べている。

首相に就任したネタニヤフは、1996年の著書『テロとの闘い』の中で、新戦略を打ち出した。その中で、イスラエルはテロリストと戦うのではなく、テロリストを支援する国家と戦うのだ。より正確には、米国にイスラエルの戦いをやらせるのだ、と述べている。2001年に彼はこう述べている。

まず、理解すべき最も重要なことは、主権国家の支援なくして国際テロリズムは存在しないということだ。この国家による支援をすべて取り除けば、国際テロリズムの足場はすべて粉々に崩れてしまう。

ネタニヤフ首相の戦略は、アメリカの外交政策に組み込まれていた。シリアを排除することは常に計画の重要な一部だった。このことは、9.11の後、[ウェスリー・クラーク将軍](#)に確認された。まずイラクから始め、シリア、レバノン、リビア、ソマリア、スーダン、イランに移る。イラクが最初で、次にシリア、そして残りとなる。(ネタニヤフ首相のイラク戦争キャンペーンは、デニス・フリッツの名著『[致命的な裏切り](#)』に詳しく書かれている。イスラエル・ロビーの役割については、イラン・パッペの名著『[Lobbying for Zionism on Both Sides of the Atlantic](#)』に詳述されている)。イラクで米軍を襲った反乱は、5年間のスケジュールを後退させたが、基本戦略は変えなかった。

米国はこれまでに、イラク（2003年の侵攻）、レバノン（米国はイスラエルに資金を提供し武装）、リビア（2011年のNATOによる空爆）、シリア（2010年代のCIAによる作戦）、スーダン（2011年にスーダンを解体するために反政府勢力を支援）、ソマリア（2006年にエチオピアの侵攻を支援）に対する戦争を主導または後援してきた。イスラエルが熱烈に求めているイランとの戦争は、まだ議論のレベルにある。

奇妙に思えるかもしれないが、CIAはこれらの戦争を戦うイスラム主義ジハード主義者を繰り返し支援してきた。CIAは結局のところ、1970年代後半からアフガニスタンでムジャヒディーン（聖戦士）を訓練し、武装させ、資金を提供した。そうやってアルカイダを創設する手助けをしたのだ。

確かに、オサマ・ビンラディンは後に米国に反旗を翻したが、彼の運動はすべて米国が作り出したものである。皮肉なことに、（米ジャーナリスト）シーモア・ハーシュが確認しているように、「アルカイダによる米海軍第5艦隊司令部への爆弾攻撃が間近に迫っていることを米国に密告」したのはアサドの諜報活動だった。

ティンバー・シカモア作戦は、シリアのアサド政権を打倒するためにオバマ大統領が開始した、10億ドルをかけたCIAの秘密プログラムである。CIAは過激で極端なイスラム主義グループに資金を提供し、訓練を受けさせ、情報を提供した。

CIAはまた、リビア（2011年にNATOに攻撃された）の武器庫からシリアのジハード主義者たちへ武器を運ぶ「ラットライン」にも関与していた。2014年、シーモア・ハーシュは「レッドラインとラットライン」という記事でこの作戦についてこう述べている。

「未公開の報告書の極秘付属文書には、オバマ政権とエルドアン政権（トルコ）が2012年初めに交わした密約が記されていた。それはラットラインに関するものだった。CIAはMI6（イギリス情報部）の支援を受けて、カダフィの武器庫からシリアに武器を運ぶ役割を担っていた」

ティンバー・シカモア作戦の立ち上げ直後の2013年3月、ホワイトハウスでのオバマ大統領とネタニヤフ首相の共同会見で、オバマ大統領はこう述べた。

「シリアに関して、米国はアサド支配の終焉を早めるため、同盟国や友好国、シリアの反体制派（アルカイードと読め）との協力を続ける」。

米・イスラエル・シオニストのメンタリティでは、敵対国が交渉を求めるのは弱みをさらけ出した表れと受け取られる。自分から交渉を求める者は、イスラエルやアメリカの独占資本に食い殺されて終わるのが普通だ。私たちは最近、レバノンでこれを目の当たりにした。

レバノン政府の外相は、「ヒズボラのハッサン・ナスララ前事務総長が暗殺される数日前、イスラエルとの停戦に合意していた」ことを確認した。ヒズボラは、アラブ・イスラム世界が望む2国家解決に沿った和平合意を受け入れる意志を長年持っている。同様に、イスラエルはガザでの戦争を終わらせる交渉の代わりに、ハマスの政治責任者であるイスマイル・ハニエをテヘランで暗殺した。

シリアでも同様に、アメリカは政治解決を一切求めず、和平プロセスにことごとく反対した。2012年、国連はシリアの和平協定を取り決めたが、和平協定の初日にアメリカによって阻止された。アメリカは和平ではなく、アサドを辞めさせるよう要求した。

2024年9月、ネタニヤフ首相は国連総会で演説し、中東の地図を「祝福」と「呪い」に分け、レバノン、シリア、イラク、イランを呪いの対象にした。本当の呪いとはイスラエルの挑発と戦争の道であり、いまやレバノンとシリアを巻き込んだが、ネタニヤフ首相は米国をイランとの戦争にも引きずり込みたいと熱望している。

アメリカとイスラエルは、イスラエルの敵でありパレスチナの大義の擁護者である国を、またひとつ滅ぼすことに成功したとハイタッチし、ネタニヤフ首相は「歴史的プロセスを開始した功績」を自賛している。

おそらくシリアは、これまでのアメリカ・イスラエルによる政権交代作戦で起きたように、多くの武装した主体による戦争が続くことになるだろう。

要するに、ネタニヤフ首相のイスラエルの要請によるアメリカの干渉は、中東を荒廃させ、100万人以上の死者を出し、リビア、スーダン、ソマリア、レバノン、シリア、パレスチナで全面戦争が燃え盛り、核保有の瀬戸際に立たされているイランは、自らの傾向に逆らって、この事態に追い込まれている。

これらすべては、極めて不当な「大義」に基づいて行われている。すなわち前7世紀のヨシュア記に基づいて、シオニスト過激主義のためにパレスチナ人の政治的権利を否定することである。驚くべきことに、イスラエルの宗教的狂信者たちが拠り所としているこの書物によれば、イスラエル人はこの土地の本来の住民ですらなかった。このテキストによれば、神はヨシュアとその戦士たちに、この地を征服しわがものとするために何度も大量殺戮を行うよう指示している。

このような背景に抗して、アラブ・イスラム諸国は、そして実際、世界のほとんどすべてが団結して、イスラエルとパレスチナの間の2国家解決と和平を求めてきた。

しかし、イスラエルとアメリカは、そのような2国家解決策など眼中にない。そうではなく、廃墟と砂漠を作り、それを「平和」と呼ぼうとしているのだ。  
(了)

筆者のジェフリー・サックスはコロンビア大学教授、地球研究所長

【翻訳チェック、中見出し 鈴木頌】